


 ざいそう

## 建設機械と除雪作業と私

佐野俊男



この1月で喜寿を迎えた。この77年を振り返ると、経営にあたってからの55年の間、建機と雪に関わりがなかった年はない。思い出深いのは昭和38年(1963年)の38豪雪の時の建設機械での除排雪作業だ。入社した昭和31年(1956年)は、福井地震やジェーン台風による水害の災害復旧、国道8号線の新設工事が盛んで、福井は他県と比較しても建設機械の導入が多く、米国のキャタピラー社やインターナショナル・ハーベスタ社の中古ブルドーザーが多数稼働していた。エンジンのオーバーホールや足回りの補修作業等建設機械の修理を自社の事業の第二の柱として育てるべく、日々建設機械の技術者の教育育成に心血を注いでいた。昭和32年には県内納入台数が20台程度しかなかったコマツとサービスディーラ契約を締結し、需要が伸び始めた建機の販売サービスに全身全霊を注ぎ多忙を極めた。とにかく仕事が面白い時代でもあった。そのような時期に38豪雪が襲ってきた。1月10日から2月4日迄ものすごい勢いで雪が降り続き、福井市内の積雪量は実に213cm、総降雪量は557cmとなった。市民は老若男女問わず連日連夜屋根の雪降ろしに明け暮れ、狭い道路は雪であふれ、人々の出入りは2階からが常となり、やまぬ雪空を眺めては皆、不安な日々を過ごしていた。道路除雪は生活道路確保が優先となるが、当時、除雪車両は絶対量が不足していた。特に排雪には時間・場所・道路の制限があったため、河原、校庭など空いている広い場所があれば、除雪や排雪の仕方や段取りを皆で考え、様々な知恵を出し合い、限られた場所と機械の有効活用法を検討した。

地方が除雪排雪で苦勞をする中、当時の河野一郎建設大臣が2月早々には新潟から北陸3県、滋賀県までの国道8号を除雪最優先で開通させ、生活物資の輸送に万全を期せとの厳命を出した。大手ゼネコン数社が大型ブルドーザーを投入し滋賀県側から除雪に加わり、我々はコマツ粟津工場から当時国内最大級の24tブルドーザーを数台調達し北陸側から投入した。大型ブルの威力はすさまじく30cmほどのアイスバーンをこともなげに砕いてゆく姿には、機械化の進展と雪害からの復興に大きな希望を感じた。指導力のある大臣の一言で官民一体となり、国道は3日間で全線開通

した。その後の56豪雪(1981年)は、降雪量が38豪雪より多かったが、38豪雪の経験が生き慌てることは少なかった。

このような豪雪を二度経験した後、建設機械の販売代理店各社が集結し、除雪時の緊急サービス体制の確立、オペレータに対する除雪機械の運用管理の指導、除雪作業の安全第一での遂行を目的に福井県除雪機械協会を設立した(現在は(社)日本建設機械化協会関西支部の除雪技術委員会に移行している)。発足した1985年には記念として、北陸地方建設局の指導のもと、近畿地区で初となる第37回除雪機械展示実演会を福井市で開催した。当日は7150名という多数の見学者の参加を得、除雪排雪に対する関心を深めてもらい、大成功で終えることができた。この成功の陰には当時協会顧問であった故竹内武県会議長の献身的な協力があったことは今でも忘れない。

現在、地球温暖化が叫ばれ、降雪量も38豪雪時の半分になった。ここ10年間は市内で積雪が100cmを超えた年はない。花形だったドーザーショベルも、油圧ショベルの登場で目にする事はなくなってしまった。降雪時期になると、自社が請け負うであろう除雪区域の道路の状態を事前に見て歩くオペレータもいなくなってしまったようだ。確かに、豪雪は災害ではあったけれども、あの当時を振り返ると、豪雪に見舞われながらも、自社の成長や建機の発展、除雪技術の進展が目に見えて、豪雪を跳ね返す活力に皆があふれていた。また地方と国、地域社会が一丸となって課題克服にそれぞれが自主的主体的に取り組んでいたようにも思う。誠に懐かしい思い出である。

予報技術がどんなに進んでも、いつ自然が我々を襲ってくるかは誰にもわからない。降雪0の確証がない限り、私達雪寒地域の住民は過去の災害からの教訓を忘れることなく、後裔に伝えつつ、建設除雪機械と共に雪害に常に備え、克雪、利雪、親雪に取り組んでゆかねばならない。